

であったことを考えると、満足できる結果であった。グリオーマについては、照射野内で治療効果が確認できたが、辺縁部の病変の拡大を抑えることはできず、従来の治療法と同様の問題が認められた。

症例により、病巣の局在やガンマナイフ前の治療の影響など、さまざまな因子が関係しているため、一律に結果を総括はできないが、分割照射の有用性は、示された。

## 9 Cervicogenic headache を来した non-traumatic cervical instability の治療

佐々木 修・中里 真二・鈴木 健司  
矢島 直樹・小池 哲雄

新潟市民病院脳神経外科

頸椎疾患由来の頭痛は cervicogenic headache として知られ、原疾患の治療により軽減する可能性が指摘されている。しかし、認知度は低い。今回、頑固な後頭一後頸部痛を長期間訴え、頸椎の instability を認めた 4 例に対し手術を施行し、良好な結果を得た。症例を提示する。

〔症例 1〕70 才 男性。

【現病歴】14 年 1 月ごろより頸を動かすとズッキとするようになった。7 月より痛みを伴うようになり、動かすのがやっととなった。入院時、頸を動かすときに強い後頭一頸部痛がある以外、神経学的に異常なし。

【検査所見】AAD あり。C1 の lamina 後方に 1% キシロカイン 3ml + デカドロン 4mg 注入。痛みは一時的ではあるが劇的に改善、頸の動きも自由となる。痛みは C1C2 の instability と関連したものと考え手術施行。

【手術】C1C2 後方固定施行 + iliac bone graft。術後、頸の運動制限があるが、痛みはほぼ消失。

〔症例 2〕34 才女性。若い時から頭痛持ち。最近再び後頭一後頸部痛、上肢のだるさあり。一時両手のシビレあり。また、前後屈で後頸部に痛み出現。頸椎は kyphotic で、C4/5 に著明な angulation あるも、MRI では異常なし。半年ほど保存的に加療するが、改善なく、事務仕事は継続不能となる。

C4/5 の棘突起間に薬剤（キシロカイン + ステロイド）を注したところ、痛みは一時的ではあるが完全に消失。症状は同部位の instability によると考へ、固定術（Spinous process wiring + iliac bone graft）を施行。術後痛みは消失、就業中で 3 年後の現在まで再発はなし。

〔症例 3〕42 才女性、5 年前より左の後頭一後頭部、肩甲背部、肩、耳の奥に痛みあり、半年前より悪化。左上肢に違和感あるが、知覚異常や脱力なし。頸椎は kyphotic で、C4/5 に angulation あり。症状は棘突起間への薬剤の注入により一時的に消失した。半年ほど保存的に加療したが、仕事（看護師）不可となり手術した。術後、通常勤務に服し 1 年半たつが、『症状はないとっていい』状態である。

〔症例 4〕61 才、女性、農家。3 年前から後頭後頭部痛あり。また、時々両手、両足がしびれることがある。最近、頭痛悪化。来院時、神経学的には明らかな異常なし。頸椎機能写では C3/4 で後方にすべる。C3/4 interspinous space に 1% キシロカイン 3ml + デカドロン 4mg を注入。後頭一後頭部痛は数日間消失する。

【手術】laminectomy C3 C4 + laminoplasty C5 C6, C3C4 fixation using lateral mass plating with iliac bone graft。術後 F/U 期間は短いが頭痛後頭部痛は消失している。

【結語】頸椎の instability は cervicogenic headache の原因となりえる。不安定性を呈するレベルの interspinous space へのキシロカイン + ステロイドの注入はその診断、治療に有用である。保存的療法に抵抗する難治例では固定術が有用である。

## 10 Heat pipe 技術を用いた non-stick bipolar forceps (IsoCool) の使用経験

小澤 常德・高橋 祥・相場 豊隆  
県立新発田病院脳神経外科

【はじめに】脳神経外科の手術において bipolar forceps は必須の手術器具である。しかし、開発から 50 年以上経つが、先端の“焦付き”が術者を